

鈴木有郷牧師説教

1/09/11 信仰の危機と神の働き イザヤ書 55:8-11

イスラエルの歴史の中で最も困難を極めた時期は、イスラエルの民の大部分がバビロニアやアッシリアに捕囚として連れていかれた時代です。紀元前6世紀、7世紀に起こった歴史的大事件です。

その暗く、絶望に満ちた時期に彼らは問わざるを得ませんでした。「神は私を心にかけておられるのか。私の存在を知っておられるのか。」この問いの背後にある精神的動揺、魂の揺れ、それは信仰の危機以外の何ものでもありませんでした。

この信仰の危機に直面したイスラエルの民に、勇氣と力を与えようと必死に頑張ったのがイザヤ、エレミア、アモス、ホセア等の預言者と呼ばれる人々でした。彼らは精神的混乱にいる民に語り続けました。「勿論、神は私たちを心にかけてくださっている。忍耐しなさい。信仰を強く持ちなさい。」

しかし、預言者は同時に、いかなる人間も神の愛に値しないことを肝に銘じて知っていました。ある預言者は記しています。「われわれの正しい行いは汚れた衣のようだ。」人間は神の赦しを必要としている。しかし、汚れた雑巾のような心を持つ人間は神の赦しに値しないのです。

そうであるならば、神の赦しはどのようにして可能となるのでしょうか。実は、この問いへの答えは、預言者にも分かりませんでした。「神の思いは私たちの思いと異なる。神の道は私たちの道と同じではない。」と言うより他に術がなかったのです。

新約聖書はこの預言者も答えられなかった問いに答えています。正しい行いさえ汚れきった衣のような私たちを、神はどのようにして救われるのだろうか。それに対する答えはこうです。神は私たちの罪の結果を自ら負い給うた。その痛みによって私たちは癒された。神ご自身が、私たちが負うべき罰を私たちに代って背負われた。イエスの十字架がその証しだ。

この福音は、人間の理性やロジックを超越します。ですから私たちはそれをへりくだった心で受け入れる以外に道はありません。

私は、何年も前に東京のある教会で聞いた一人の方の証しを忘れることができません。その男性は、3人兄弟の末っ子でした。戦争でお父さんを亡くし、小さな八百屋さんを営んでいたお母さんに育てられました。お母さんは朝から晩まで身を粉にして働き、日曜日は疲労のあまり、起き上がることもままならなかったそうです。

ことさらやんちゃ坊主だった末っ子の彼は、ある日学校で喧嘩をし、相手に傷を負わせてしまいました。相手の両親は高額な賠償を要求し、払わなければ警察に訴えると脅しました。とても払える額ではありません。そこで少年のお母さんは、息子が受けるべき罪の代価として、一年間毎日曜日その家庭のお手伝いさんとして無料で働くことを申し出たのだそうです。

男性はその証しを次のような言葉で締めくくりました。私たちが払うべき代価を神が代って払ってくださるといふ福音の真髄を理屈で捉えることはできません。しかし、私の身代わりとなってくれた母のことを思うと、私はそれを喜んで受け入れることができます。

私たちは信仰の危機にさらされて、神は私を心にかけて下さっているのだろうか。私の存在をご存知なのか、と問いたい気持ちにかられることがよくあります。

しかし、その答えは明白です。「神はその独り子を世に送られたほどにわたしたちを愛してくださった。神は御子イエスを代価にあなただけを買ってくださった。だから疑う必要はない。」

その通りです。その通りです。